

## Trial of Participatory Community Formation Using Architecture Elements (Report) : A Case of “Exhibition of Literature Recommended by Modern Female University Students”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 工藤, 聖奈, 水谷, 俊博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1686">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1686</a>

# 建築要素を用いた参加型コミュニティ形成の試行（活動報告） —『令和文学女子推し本展』を事例として—

Trial of Participatory Community Formation Using Architecture Elements (Report)  
: A Case of “Exhibition of Literature Recommended by Modern Female University Students”

工藤 聖奈\*1 水谷 俊博\*2  
KUDO Seina \*1 MIZUTANI Toshihiro \*2

空間デザイン 参加型手法	コミュニティ まちづくり	地域計画 展示計画
-----------------	-----------------	--------------

## 1. はじめに

近年、芸術祭等において、野外にアート作品の展示をおこない、来場者に直に作品に触れてもらうことにより、作品体験を促す事例が多くみられる。また、そのようなアート展へ建築作品（仮設物を含む）を展示し、地域のコミュニティへ働きかける試み（大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ等の出展作品群等）もみられる。

本稿においては、小規模な建築要素の屋外展示により、来場者がどのようなアクティビティをおこなうかを把握することへつながる一試行をおこない、今後の

参加型コミュニティ形成へのプロセスの手がかりをさぐることを、当初の目的としている。

2021年10月30日に開催された、武蔵野大学オープンキャンパスにおいて、武蔵野大学文学部日本文学文化学科土屋近現代文学部ゼミが主催し『令和文学女子推し本展』を開催。その展示会場構成計画を、工学部建築デザイン学科水谷俊博研究室が協働でおこない、小規模な木造の仮設建築物の要素を野外に展示をおこなうプロジェクトの実践をおこなった。対象敷地は、大学キャンパス内の「むさし野文学館」と連動するかたちで、文学館が入る施設「紅雲台」の北東部外構の周辺で開催した。



■展示風景（紅雲台前、北東側から眺める）

\*1 工学研究科建築デザイン専攻修士1年 \*2 工学部建築デザイン学科教授





■むさし野文学館内観



■むさし野文学館本棚上部からの眺め

## 2. むさし野文学館概要

むさし野文学館は、「内向の世代」の批評家として幅広く活躍した日本の文芸評論家の秋山駿氏、装幀家の秋山法子氏が逝去するまでに所蔵していた約1万5000点の蔵書等を開架、展示した施設である。武蔵野大学のキャンパス内にある建物「紅雲台」の一角の部屋を改修し、武蔵野に関連するアーカイヴ資料を収集、公開すると同時に、WEBを通じた日本の文学文化の発信や映画製作等も行っている。おびただしい数の書籍等の資料を限られたヴォリュームの中に効率よく収納するとともに、収蔵物(本)そのものを来場者に魅せ、そして直に触れることで、文学の息吹を体感できるような空間づくりをおこなっている。また、学内の学生ばかりでなく、地域に開かれた空間となっており(展示期間の2021年10月現在においては、新型コロナウイルスの影響で閉館中)、来館者は蔵書を手にとることができる。本プロジェクトは、この「むさし野文学館」と連動したプログラムとして実施された。

## 3. 令和文学女子推し本展概要

『令和文学女子推し本展』(主催：武蔵野大学文学部日本文学文化学科第18期土屋近現代ゼミ、後援：武蔵野大学経営企画部大学入試センター)は、オープンキャンパスに参加する高校生に向けて、文学の魅力オープンキャンパスに参加する高校生に向けて発信する展示企画である。展示コンテンツは、ゼミがおすすめする本、すなわち「推し本」をセレクトし、選出した書籍の紹介と推薦内容を記載したパネルの掲示をおこなう。

展示対象の書籍は下記の一覧の通りである。

展示書籍	展示書籍
『Day to Day』講談社編集	『ブルーもしくはブルー』山本奈緒
『今夜、すべてのパーで』中島らも	『俳句歳時記第五版秋』角川書店編集
『金子みすゞ名詩集』金子みすゞ著作 彩園社文芸部編集	『少年と犬』馳星周
『アクロイド殺し』アガサクリスティー原作 羽田詩津子訳	『うつくしが丘の不幸の家』町田そのこ
『ぼくは勉強が出来ない』山田詠美	『聖夜』佐藤多佳子
『おやつアンソロジー』阿川佐和子、阿部敦子ほか	『漁港の肉子ちゃん』西加奈子
『神・動物・人間—伝承を生きた世界—』	『海と毒薬』遠藤同作
『銀河鉄道の夜』宮沢賢治	『夜は短し歩けよ乙女』森見登美彦
『黒箱』中野好夫訳 エドガー・アラン・ポー原著	『二十億光年の孤独』谷川俊太郎



■作品展示の様子



■作品設置の様子(建築学科と文学部学生の協働)

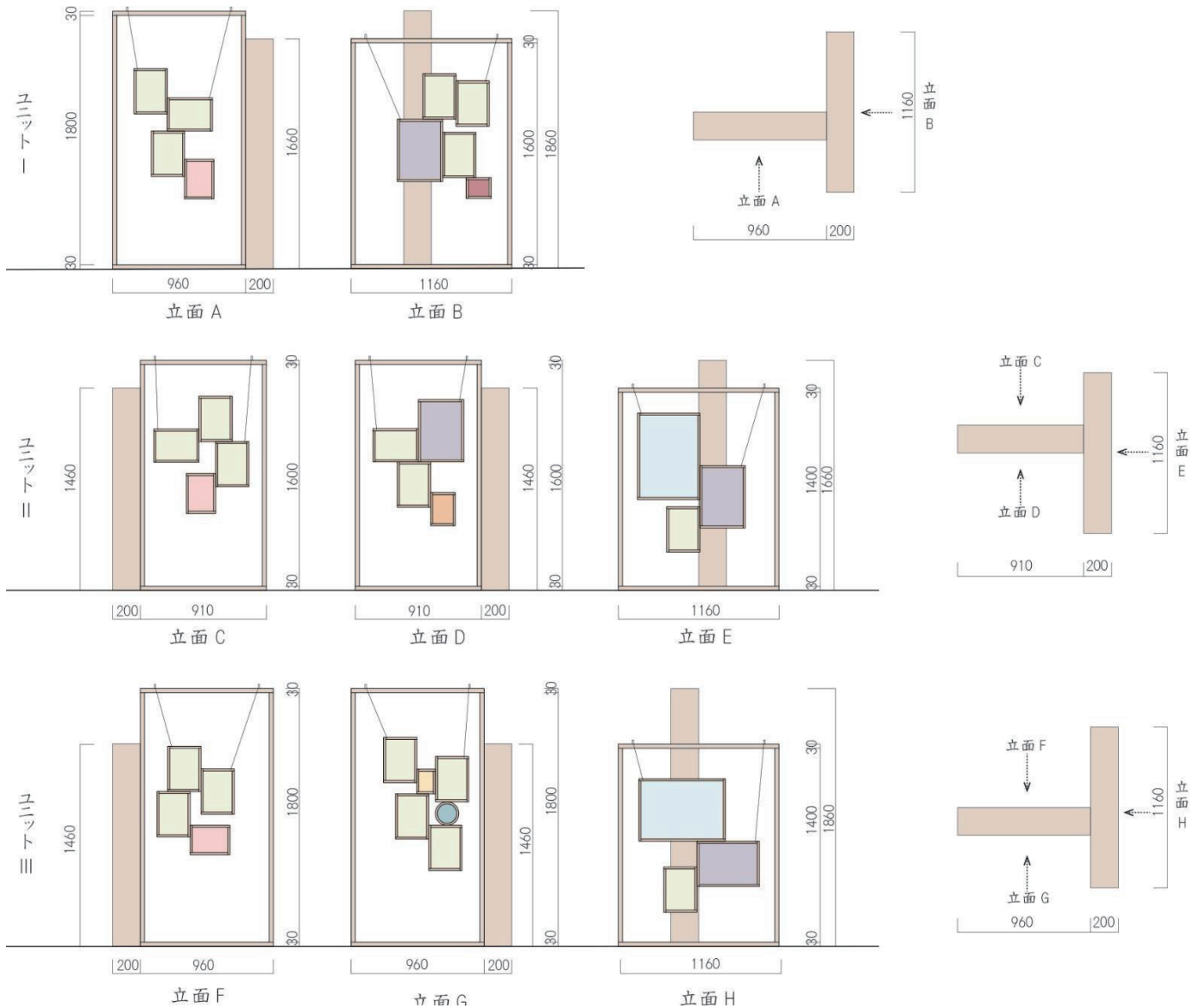
#### 4. 展示空間の詳細

展示空間はフレームの形状をデザイン・モチーフとしている。大小のスケールのフレームを設計し、本のページ自体をフレームとして表現することで、本の世界を身体スケールでめぐることができる空間を実現している。大きなフレームは本のページ全体を表現し、推し本の紹介と推薦文を記したパネルをはめ込む小さいフレームは、本の内容にフォーカスしている。

大きいフレームは2つの木集成材フレームをT字型に接続させ1つのユニットとして自立させている。ユニットⅠは1860mm×960mmのフレームと1660mm×1160mmのフレームの組み合わせ、ユニットⅡは1660mm×910mmのフレームと1460mm×1160mmのフレームの組み合わせ、ユニットⅢは1860mm×960mmのフレームと1460mm×1160mmのフレームの組み合わせで構成している。

小さいフレームは一溝ヒノキの12mm×12mm角材を使用し、4つの頂点の接合部の面積が小さいためタッカー

で固定するかたちを採用。一溝角材を使用することで、本の紹介文と推薦文を記載した1mmのパネルを角材の中心にはめ込めこむかたちの展示部材を作成しており、フレームとパネルの接合部をフレームの表裏に露出しないことと、フレームとパネルの固定強度を高める配慮をおこなっている。小さいフレームは8種類の寸法(182mm×257mm、105mm×148mm、148mm×210mm、210mm×297mm、297mm×420mm、420mm×594mm、120mm×150mm、直径140mm)で構成している。大きいフレーム1つにつき、小さいフレームは様々な大きさ・向きになるよう3~6枚を配置・連結しながら設置し、鑑賞者にとって多様な見え方になるようレイアウト計画をおこなっている。小さいフレームと大きいフレームの固定は透明のテグスによって施工し、屋外で作品を展示した際、大きいフレームのなかに小さいフレームが浮遊しているような軽快さを演出している。



■展示空間構成要素の概要図（立面図、平面図）





■制作風景をケーブルテレビが取材撮影の様子



■展示空間に関するインタビューの様子



■制作過程に関するインタビューの様子

## 5. おわりに（制作過程とプロジェクト記録の活用）

本プロジェクトにおいては、企画・制作段階における参加型（日本文学文化学科の学生との協働）の計画（施工含む）の実践を行った。参加型でモノをつくる過程から展開し、制作後の建築要素による参加型コミュニティ形成の考察の実践を今後の課題としたい。

また、展示と並行して、本プロジェクトの企画、制作過程、作品展示の一連の流れを、イメージPVおよび記録動画としておさめるかたちで、各段階における取材、及び、映像の撮影が、放送事業（ケーブルテレビ）企業のJ:COM 西東京によっておこなわれた。本記録を参考資料として活用することもふまえて、今後の考察の一助となることを想定している。

## 謝辞

本展示の主催者であり、空間づくりに協働いただいた、武蔵野大学文学部、土屋忍教授、土屋ゼミの学生皆様に感謝いたします。また、オープンキャンパス運営関係各位に感謝いたします。

尚、本プロジェクトから展開した作品『Still Breathing』が野外アート展「トロールの森 2021」にて出展されました。（別稿『国際アート展における街とつながる実践』（『武蔵野大学建築研究所紀要』第3号）参照）

また、大学オープンキャンパス自体が、新型コロナウイルスの影響で当初予定の対面形式で開催されなかったため、来場者の人数が極端に制限され、本稿の当初の目的であった、来場者のアクティビティの考察をおこなうに足る参加者の母数を確保するに至らなかったため、活動報告の記述にとどまっていることを付記させていただきます。